

目的 毒性を有する担子菌については、毒性物質をはじめ種々の作用をもつ物質が明らかにされており、なかでも抗菌性物質の検索、単離、同定は比較的系統的に行なわれている。一方、種々の担子菌の子実体を食用しているが、これらについてはほとんどそうした報告例をみない。そこで普通に食用する担子菌について抗代謝性を検討し、つづいて抗代謝物質の単離、同定を行なったので報告する。

方法 抗代謝性を有する食用担子菌の検索は、*B. subtilis* を用い、最小培地を使用して感受性ディスク法により行なった。抗代謝物質の検索、単離には、各種イオン交換樹脂による分画に、抗代謝試験、アミノ酸分析等を併用した。得られた結晶の同定は、元素分析、MS、NMR、IR の各スペクトル等によって行なった。化合物の抗代謝力の検討は、最小培地を使用した特殊な条件下における最少発育阻止濃度の測定によった。

結果 1. 食用担子菌 17 種のうち抗代謝性が認められたのは、*Rozites caperata* と *Rhodophyllus crassipes* の 2 種の担子菌であった。2. *R. caperata* から単離された抗代謝物質は *S*-2-aminoethyl-L-cysteine と同定された。3. *R. crassipes* から単離された抗代謝物質は 2-amino-3-butenoic acid と同定された。4. *S*-2-aminoethyl-L-cysteine 及び 2-amino-3-butenoic acid の最小培地を用いた特殊な条件下における 16 種の菌株に対する最少発育阻止濃度を測定した結果は、*B. subtilis*, *E. coli*, *S. typhimurium*, *C. freundii* の 4 菌株に対していずれも $10\mu\text{g}/\text{ml}$ であった。5. 両化合物の Mueller Hinton 培地に発育する嫌気性菌 27 菌株、好気性及び通性嫌気性菌 33 菌株に対する最少発育阻止濃度の測定結果は、*C. botulinum* の type E 及び type F の 2 菌株に対していずれも $6.25\mu\text{g}/\text{ml}$ であった。